

## 野外レクリエーション行動の予測に 関する調査研究

高見 彰\* 長谷川 純三\*\* 池田 勝\*\*

### A Study on the Prediction of Outdoor Recreation Behavior

AKIRA TAKAMI\*, JUNZO HASEGAWA\*\*, MASARU IKEDA\*\*

The purpose of this study is to analyze the beliefs, attitudes and behavioral intentions toward outdoor recreation and predict its behavior, using Fishbein's Behavioral Intention Model.

For this study, 816 undergraduates from four universities were selected as the subjects.

The results of this study are as follows :

1. The intention towards the outdoor recreation activities is the most predictable factor in outdoor recreation behavior.
2. The attitudinal components played more important role than normative components in determining outdoor recreation behavior and behavioral intention.

#### I 研究の目的

現代は、余暇の増大、特に休日の増加と余暇活動に対する支出の増大など、レクリエーション活動の実施を可能にする条件が著しく改善されてきたことに加え、人々の間に、ゆとりのある生活、豊かな生活、さらには真の生きがいを求めようとする気運が高まってきたことから、単なるレジャーや受動的娯楽を脱皮して、本格的なレクリエーションの時代に突入しつつある。

そのような状況の中で、人々の自然に対する関心は単なる観光や自然鑑賞以上の、より深みのある積極的態度を伴い高まりつつある。人々が自然の中で、楽しく身体的・精神的健康づくりを行ない、それによってスムーズな人間関係を作り出し、ひいては新しいライフスタイルを創造するために、野外レクリエーション活動は欠かせないものとなってきている。

そのような人々の欲求を満たし、野外レクリエーション活動の実施を促進させるためには、野外レクリエ

ーション行動をとりまく諸要因を明確にしていく必要がある。従来、スポーツ・レクリエーション行動の規定要因として、人口統計学的変数を用いた研究が多くみられた。しかし、そのような変数は、状況の変化によって関与度が異なったり、多数の変数を用いても、それらの変数の行動に対する関係を明細に説明する理論的枠組が、みられなかったりするという特徴がみられた。

そこで、本研究では、社会心理学的立場にたち、野外レクリエーション活動への参加行動を規定する主要因として、個人の態度を扱い、一般大学生を対象にして、野外レクリエーション行動を分析し、行動予測とそのメカニズムを明確にすることを目的とした。

#### II 研究の方法

##### 1. 調査方法

調査対象は、東京、神奈川、兵庫にある大学の男女一般学生816名であり(表1)、調査は1983年11月、体育の授業中に集合面接法により実施した。

\* 筑波大学大学院体育研究科( The Graduate School of the University of Tsukuba )

\*\* 筑波大学体育科学系( The University of Tsukuba )

表1 対象者の数

	スキー		キャンプ		合計
	男	女	男	女	
M大学(東京)	74	0	31	45	150
J大学(東京)	71	76	86	49	282
T大学(神奈川)	53	9	51	40	153
K大学(兵庫)	54	58	50	69	231
合計	252	143	218	203	816
	395		421		

2. 分析枠組

本研究では態度による行動予測理論において、最も科学性の高いと考えられる Fishbein と Ajzen<sup>1)</sup> の「The theory of reasoned action」に注目して、その分析枠組に準拠して研究を進めた。

Fishbein らの考え方として、ある特定の行動は、その行動を遂行しようとする、その人の意図によって決定され、この行動意図は2つの要因の関数とみなされる。第一の要因は「ある行動を行なうことに対する態度」であり、これは行動がもたらす結果についての信念と、それらの結果に対する評価とに関係するものである。第二の要因は、「主観的規範」すなわち、行動意図に及ぼす社会的環境の影響を処理するものでありある準拠集団のメンバーが問題にされている行動を行為者が行なうべきであると考えているかどうかについての行為者の信念と、それらの期待に従う動機づけに関係する。人がある行動を肯定的に評価している時や重要な他者が「彼はその行動を行なうべきだ」と考えているという信念を持つ時、その行動を起こす意図を持つといえる。さらに、行動に対する態度と主観的規範間の葛藤の状況における意図の決定要因として、これらの二要因の相対的重要性を知る必要がある。両方の要因が意図の重要な決定因となりうるが、態度的・規範的要因の相対的加重は対象者によって変化するものである。

さらに、Fishbein は以上のことを次の予測式(1~3)で説明している。

$$B \sim BI = (A_B) W_1 + (SN) W_2 \dots\dots\dots(1)$$

B : 行動, BI : 行動Bに対する行動意図  
 A<sub>B</sub> : 行動Bに対する態度

SN : 主観的規範 W<sub>1</sub>, W<sub>2</sub> : 相対的加重

$$A_B = \sum_{i=1}^n b_i e_i \dots\dots\dots(2)$$

b<sub>i</sub> : 行動Bがもたらす結果 i についての信念  
 e<sub>i</sub> : 結果 i についての評価  
 n : 信念の数

$$SN = \sum_{i=1}^n n b_i m_{ci} \dots\dots\dots(3)$$

n b<sub>i</sub> : 規範信念, m<sub>ci</sub> : 重要な他者 i に従う動機づけ  
 n : 関係ある重要な他者の数

ここで予測式(1)は、ある特定の行動Bを予測するためには、その行動を遂行しようとする人の行動意図(BI)を測定することが最も有効であり、またその行動意図は、ある行動に対する態度(A<sub>B</sub>)と主観的規範(SN)の関数によって測定することを示す。予測式(2)は、行動に対する態度は、行動がもたらす結果についての信念(b<sub>i</sub>)と結果に対する評価(e<sub>i</sub>)との積の総和と相関が高いこと、また、予測式(3)は、主観的規範(SN)は規範信念(n b<sub>i</sub>)と、他者に従う動機づけ(m<sub>ci</sub>)との積の総和と相関が高いことを各々表わしている。図1は、上記の予測式を要約した行動意図形成のモデルである。

3. 変数とその合成

本研究では、調査票をFishbeinの行動予測理論で用いられた諸変数を野外レクリエーション行動の内容におきかえ、サンプル調査票を参考に作成した。用いた変数は6個であり、調査項目は計52項目である。

(1) 行動

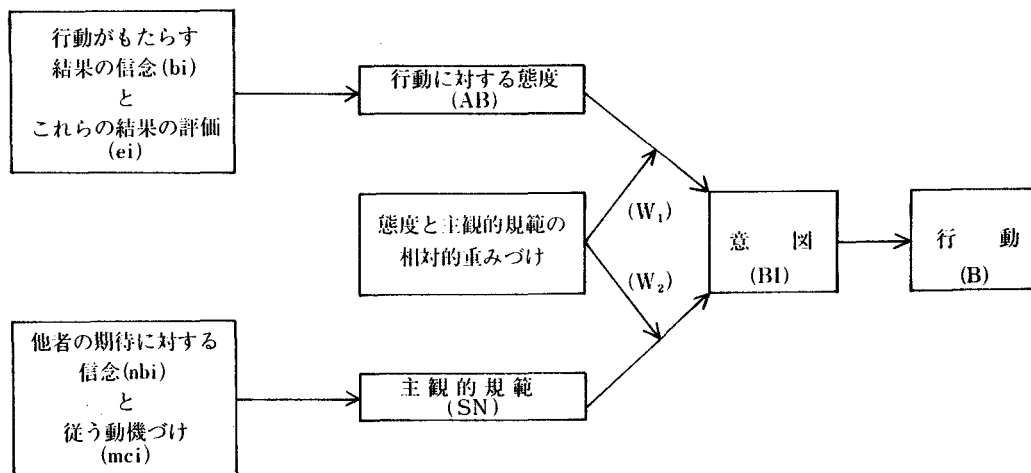
調査票の活動実施度調査において、「現在もよくやっている(年間3回以上)」、「これから是非やるつもりだ」の項目のいずれかに反応したものを行動得点とした。

(2) 行動意図

行動の直接的決定因となる意図の強さを測定するために、「私は十分な時間があれば、キャンプ(スキー)を行うつもりだ」という設問に対して、「非常に思う」から「非常に思わない」までの7段階の確立次元の尺度によって行動意図の蓋然性を測定した。

(3) 行動に対する態度

行動に対する好悪の程度を知るために「私がキャン



↑  
注：矢印は影響の方向を示す

図1 行動意図形成モデル

プ(スキー)を行うことは、私はとって”という設問に対して、Fishbeinの用いた対形容詞(良い—悪い、面白い—つまらない、無益である—有益である、不愉快である—愉快である)を用い7段階尺度のSD法で測定した。

(4) 結果に対する評価と信念(行動信念)

行動のもたらす結果と信念について、19項目を採用したが具体的質問項目については以下のとおりである。

1. 心のやすらぎを求めることは
2. 自然に親しむことは
3. 仲間がたくさんできることは
4. 気分転換をすることは
5. 体が丈夫になることは
6. 健康が増進することは
7. 家族や仲間と楽しむ機会が増えることは
8. 費用がかさむことは
9. 自然が破壊されることは
10. 冒険をすることは
11. 規則正しい生活を送ることは
12. 地元地域の経済がうるおうことは
13. 教養が身につくことは
14. 創造性を発揮することは
15. 他人との関係が深まることは
16. 自然を保護することは
17. 時間が拘束されることは
18. どこか遠くへ出かけることは

19. 人ゴミから逃れることは

4. 統計的解析

結果に対する信念は、以上の項目に対して「非常に良いことだ」から「非常に悪いことだ」までの7段階評定尺度で測定した。結果に対する評価は、キャンプ(スキー)を行うことで以上の項目の内容を得ることができるかどうかを7段階評定尺度で測定した。

(5) 主観的規範

行動者に対する社会的(規範的)影響を見るために「私の身近な人々は私がキャンプ(スキー)を行うべきだと考えている」の設問に対して「非常に思う」から「全く思わない」までの7段階評定尺度で測定した。

(6) 他者の期待に対する信念と従う動機づけ(規範信念)

「私の家族は私がキャンプ(スキー)を行うべきだと考えている」などの項目に対して7段階の評定尺度で確率次元的蓋然性を測定した。また、重要な他者に関しては、Fishbeinのサンプル調査票を参考にして次のように決定した。

1. 家族 2. 親友 3. 同僚 4. 教師(指導教官) 5. キャンプ(スキー)指導者

他者に従う動機づけでは「私は家族の者が私に望んでいることを行いたい」などの項目に対して7段階尺度で測定した。

5. 操作上の定義

本研究で用いた変数は、いずれも7段階尺度で測定

し、それぞれの評定において、強い肯定をあらわすものから強い否定にいたるまでに、+3～0～-3の得点をえ、得点化した。各変数間の強さを見るために相関係数を求め、「態度」と「主観的規範」の合成には重回帰分析を用いた。なお相対的重みには標準偏回帰係数を求めた。

5. 操作上の定義

野外レクリエーションを「スポーツ活動型」、「総合活動型」に分け、それぞれスキーとキャンプに代表させた。スキーは若年層（20代）に圧倒的支持を得ており、<sup>2)</sup>対象者である大学生が十分興味を有する野外スポーツといえる。キャンプは、総合活動型として歴史は古く、経験度・認識度の高い活動といえる。このことから野外レクリエーションをスキーとキャンプの2活動と定議づけた。

III 結果と考察

1. 予測モデルの分析

Fishbein の予測モデルを参考にして、<sup>3)</sup>野外レクリエーション行動を規定する行動、行動意図、行動に対する態度、主観的規範、行動信念、規範的信念の変数間の相関係数（表2）と行動意図を予測するために態度と主観的規範の2変数の重回帰分析を行った。（表3）

これらの結果から変数間の関係をまとめたものが図2である。

(1) 行動と行動意図

図2から、行動意図と行動の間にキャンプでは.216、スキーでは.405の相関がみられた。

スキーに関しては高い相関が得られたが、キャンプでは高いとはいえない。これは、行動意図に高く反応した被験者が少なくない（7段階尺度で「やや思う」から「非常に思う」に回答した者405名中207名、50.1%）にもかかわらず、その中で実際にキャンプ行動を行っている者が、53名（13.1%）であったことが、行動意図と行動との相関を.216にとどめる結果になったと考えられる。

しかし、これらの相関係数は、キャンプを行いたい、スキーを行いたいという行動意図が、実際の行動をわずかであるが、予測していることを意味する。また、表2にみられるように、行動意図は行動以外の他の変数との相関についても他に比べて高い。このことは、行動意図が行動と諸変数の間の媒介変数となっている

表2 野外レクリエーションの予測モデルの構成要素間の相関係数

キャンプ					
構成要素	1	2	3	4	5
1 行動					
2 行動意図	.216				
3 態度	.211	.615			
4 主観的規範	.091	.353	.171		
5 行動信念	.203	.339	.458	.310	
6 規範的信念	.077	-.138	-.085	-.149	-.253
スキー					
構成要素	1	2	3	4	5
1 行動					
2 行動意図	.401				
3 態度	.363	.687			
4 主観的規範	.192	.335	.310		
5 行動信念	.248	.460	.479	.430	
6 規範的信念	.009	.011	.043	.098	.118

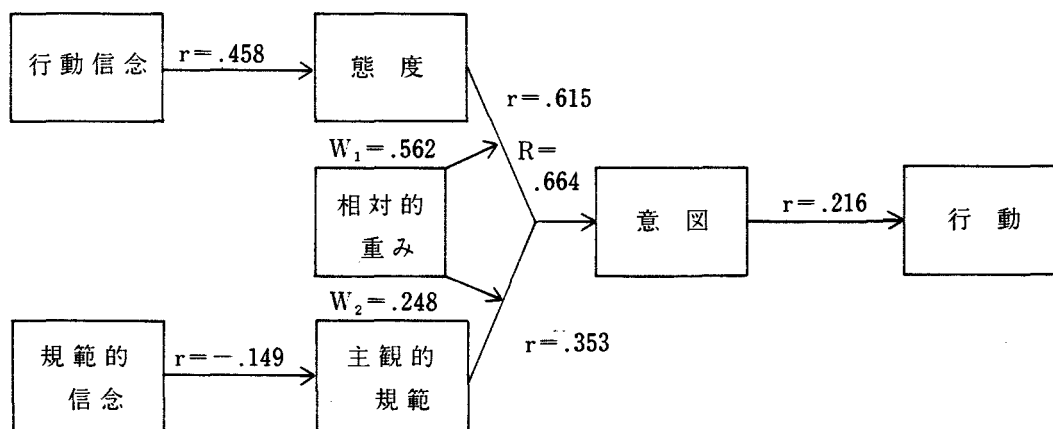
表3 行動意図を予測する回帰係数と重相関

キャンプ				
	回帰係数			
	態度	主観的規範	R	R <sup>2</sup> × 100
行動意図	.562	.248	.664	44.1
スキー				
	回帰係数			
	態度	主観的規範	R	R <sup>2</sup> × 100
行動意図	.544	.085	.722	52.2

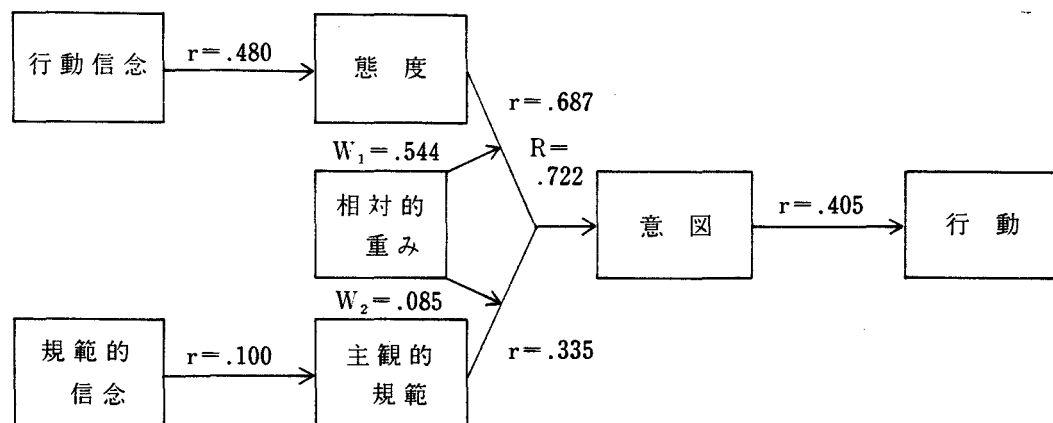
ことを示している。つまり、行動意図は行動の直接的決定因であり、野外レクリエーション行動は、その行動を遂行しようとする人の意図によって決定され、また測定される。このことは、Fishbein の仮説を強く支持するものである。

(2) 行動に対する態度と主観的規範

意図に影響する態度変数と規範変数の関係は、重相関Rで示される（表3）、Rはキャンプで.644（44.1%の変動を予測）、スキーで.722（52.2%の変動を予測）といずれも行動に対する態度や主観的規範の単相



キャンプ行動の予測モデル



スキー行動の予測モデル

図2 野外レクリエーション行動の諸変数間の関係

関係数よりも高く、行動意図さらに行動は、態度や主観的規範の単独変数よりも二変数を合成した方が、より正確に予測されることを示している。また、態度と意図の相関（キャンプ.615、スキー.687）と主観的規範と意図の間にみられる相関係数（.279、.335）から、キャンプとスキーのいずれも行動に対する態度が主観的規範よりも、予測因として強く意図に作用している。さらに、行動に対する態度がより強く作用していることは、 $W$ で表わされる標準偏回帰係数の重みによっても理解される。キャンプでは $\langle W_1 = .562, W_2 = .248 \rangle$ スキーでは $\langle W_1 = .544, W_2 = .085 \rangle$ となっており、キャンプにおいては、行動に対する態度が主観的規範

の重みの2倍以上の重みを有している。また、スキーにおいて、行動に対する態度が主観的規範の重みの倍以上の重みを有している。これは、野外レクリエーション行動の予測において、行動に対する態度が主観的規範よりも大きな予測因として認識されることの必要性を表わしている。

(3) 行動信念と規範的信念

行動に対する態度を予測する行動信念と主観的規範を予測する規範的信念の間には、次のような相関がみられた。すなわち、態度と行動信念の間には、次のような関係がみられた。すなわち、態度と行動信念の間には、キャンプ.458、スキー.480の相関があり、主観

の規範と規範的信念の間には、キャンプ-.149、スキー-.100であった。キャンプ、スキーの両者の値から、行動信念は強く態度に影響するが、規範的信念は主観的規範にはほとんど影響しないことが明らかになった。

これは、レクリエーションの特性を考えることで理解できる。つまり、レクリエーションは、社会的に承認された価値体系（規範体系）に抵触しないがぎり、他律的に強制されるものではなく、他者によって設計されるものでもない。換言すると、完全なる自由性に帰属しているという特性が、規範的信念と主観的規範との相関の低さに表われている。<sup>5)</sup>

## 2. 各変数の分析結果

### (1) 行動

キャンプ、スキーの実施度は、表4に示すとおりである。

キャンプの実施度は、13.1%と非常に低い。これはキャンプへの関心の低さを示すとともに、調査票の教示に年間3回以上と記したために、非常に低い値となつてあらわれたものと考えられる。スキーでは、50.7%と約半数のものが実施していることを表わしている。これは、スキーの普及を示すとともに、本研究でスキーがキャンプよりもすべての変数間の相関が高くなった要因となっている。

### (2) 行動意図

野外レクリエーション行動に対する行動意図の結果

表4 野外レクリエーションの行動実施

実施度	雑目	キャンプ (N = 406)	スキー (N = 410)
実 施		13.1%	50.7%
非 実 施		86.9	49.3
全 体		100.0	100.0

は表5に示した。

キャンプに対する行動意図、つまり「キャンプを行うつもりだ」という設問に対して、約半数のものが「思う」と答えているが、残りの半数は、中立的、否定的な回答をしている。しかし、先述したように、実際にキャンプを行っているものは13%にすぎない。これは、キャンプという活動が実施にいたるまでに、計画準備段階など多くのステップをふまなければならない、意図がストレートに実現されにくい状況にあると考えられる。スキーでは非常に関心が高く、約80%のものが、「スキーを行うつもりだ」と答えている。実際の実施についても、およそ半数のものが実施している。これは、キャンプとは逆に、最近の交通網の整備、スキー場の受け入れ体制、廉価なバックツアー、マスコミの取りあげ方など、実施が容易な状況にあるためと考えられる。

### (3) 行動に対する態度

行動に対する態度の調査結果を表6に示した。キャンプでは平均得点が、「面白さ」で1.29、「良さ」で1.17、「愉快さ」で1.01、「有益さ」で0.91の順となっている。スキーにおいても同様の傾向を示しており「面白さ」1.69、「良さ」1.50、「愉快さ」1.36、「有益さ」1.13の順となっている。このことから、感情・評価の項目に大きなかたよりがみられないといえる。

Riddle<sup>6)</sup>や徳永ら<sup>7)</sup>が行ったジョギング行動に対する態度では、「良さ」、「有益さ」の評価的側面に高得点を示しているが、これはジョギングの特性には、身体的効果を期待する傾向が強いため、評価的態度が強く現われたものと思われる。その観点からすれば、キャンプ、スキーでは勝敗を競うスポーツ活動と比べると自発的な自己の楽しみを追求する点で感情的側面が強くなったと考えられる。

### (4) 主観的規範

主観的規範の分析結果(表7)では、「私の身近な

表5 野外レクリエーションに対する行動意図

種目	程度	程度						
		非常に思う	かなり思う	やや思う	どちらでもない	やや思わない	かなり思わない	非常に思わない
キャンプ (N = 405)		7.4	12.1	20.6	20.5	11.9	9.1	8.4 (%)
スキー (N = 409)		28.9	25.7	5.7	5.4	4.4	4.2	5.9 (%)

表6 行動に対する態度

態度	種目	
	キャンプ	スキー
1 良 い-悪 い	1.1663	1.5037
2 面白 い-つまらない	1.2864	1.6936
3 有 益-無 益	0.9107	1.1345
4 愉 快-不愉快	1.0970	1.3614

人々は私がキャンプ(スキー)を行うべきだと考えている」という設問に対して、「思う」と答えたものがキャンプでは11.1%,スキーでは34.5%,「どちらでもない」52.0%,44.4%,「思わない」が36.5%,22.1%となっている。

ここで注目すべきは、中立的・非行為的に答えたものが非常に多いことである。これは野外レクリエーションを行う意図に他者が関与しないことを意味する。「自分にとって重要である他者がある行動をすべきであると考えていることを察知すればするほど、行動を起こす傾向にある」というFishbeinの理論に従えば野外レクリエーションの主観的規範が低いことは、意図や行動を予測するうえで大きな説明要因となっている。

(5) 行動信念

野外レクリエーションに対する結果の信念と結果の評価の平均得点を表8に示した。結果の信念については、「心のやすらぎが求まる(1)」、「仲間ができる(3)」、「気分転換になる(4)」、「楽しむ機会が増える(8)」、「冒険をする(10)」の項目は、キャンプ、スキーの両者において差がなく、野外レクリエーションの信念として共通にとらえられている。これは、江橋が指摘したレクリエーション活動の効果に一致するものである。<sup>8)</sup>

さらに平均1.00以上の項目についてみると、キャンプでは上述の項目以外に「自然に親しむ(2)」、「他

人との関係が深まる(5)」があげられる。スキーにおいては、上述の項目以外に「体が丈夫になる(6)」、「健康が増進する(7)」、「遠くへ出かけることができる(8)」が高い得点を示した。

これらの結果から野外レクリエーション行動の結果に対する信念は、キャンプでは精神的・社会的側面について肯定的・好意的信念が強く、スキーでは、さらに身体的側面が強調されている。キャンプは自然の中で生活するという解放感、喜びを前提として集団的生活、共同生活に主眼が置かれている。また、一般的にみると、キャンプを経験する場として、学校キャンプや家族・仲間同志のキャンプが多いことからみても社会的側面が強い信念としてあらわれたものと考えられる。スキーでは、最近のスキーツアブームにみられるように集団で移動し、仲間で楽しむといったスキーが主流をしめている。このことから、スキーが社会的側面に高い値を占め、またスポーツ型活動であることから身体的側面に肯定的であることは十分に理解されることである。

次に、結果の評価をみた場合、キャンプ・スキーの両者ともほぼ同じ評価をしており、19項目中12項目に2.00以上の高い得点がみられ、全体的に非常に好意的な評価が認められる。特に、両者共通の項目として、「健康の増進」、「体が丈夫になる」、「気分転換になる」、「仲間ができる」があげられる。以上のことから野外レクリエーション行動がもたらす結果について、身体的・精神的な効果に特に肯定・好意的な評価を行っている。

(6) 規範的信念

規範的信念では、キャンプ・スキーの両者において、平均得点がきわめて中立点に近いことがあげられる。

(表9) その中で分析が許されるならば、キャンプにおいて「指導教官」、「キャンプ指導者」が他の準拠集団よりも高く、個人のフォーマルな立場にある他者が

表7 野外レクリエーションに対する主観的規範

種目	程度						
	非常に思う	かなり思う	やや思う	どちらでもない	やや思わない	かなり思わない	非常に思わない
キャンプ (N=404)	1.7	2.5	6.9	52.0	6.4	9.4	21.0 (%)
スキー (N=407)	7.4	7.9	19.2	43.5	5.4	7.1	9.6 (%)

表8 野外レクリエーションに対する行動信念と結果の評価

野外レクを行うと	行 動 信 念		結 果 の 評 価	
	キャンプ	ス キ ー	キャンプ	ス キ ー
1 心のやすらぎが求まる	0.72	0.58	2.45	2.57※
2 自然に親しめる	1.54	1.13※※※	2.43	2.62※※※
3 仲間ができる	1.38	1.32	2.53	2.66※
4 気分転換になる	1.43	1.45	2.57	2.58
5 費用がかさむ	-1.05	-1.78※※※	1.88	1.76
6 体が丈夫になる	0.45	1.02※※※	2.63	2.71
7 健康が増進する	0.55	1.05※※※	2.65	2.76※
8 楽しむ機会が増える	1.29	1.40	2.35	2.54※※
9 自然破壊につながる	0.12	0.32※	2.30	2.51※
10 冒険ができる	0.63	0.55	1.64	1.80※
11 規則正しい生活が送れる	0.19	-0.65※※※	2.01	2.04
12 地元の経済がうるおう	-0.57	0.68※※※	1.51	1.57
13 教養が身につく	-0.17	-0.84※※※	2.38	2.45
14 創造性が発揮できる	0.84	-0.25※※※	2.49	2.51
15 他人との関係が深まる	1.38	1.14※※	2.31	2.42
16 自然が保護できる	-0.53	-0.88※※※	2.42	2.52
17 時間が拘束される	-0.45	-0.06※※※	1.41	1.29
18 遠くへ出かけられる	0.98	1.26※※	1.86	1.90
19 人ゴミから逃れられる	0.95	-0.54※※※	1.67	1.61

※ P<.05    ※※※ P<.01    ※※※ P<.001

表9 野外レクリエーション行動に対する規範的信念と従う動機づけ

重要な他者	規 範 的 信 念		従 う 動 機 づ け	
	キャンプ	ス キ ー	キャンプ	ス キ ー
家 族	-0.70	-0.10※※※	0.30	0.50
親 友	-0.78	0.37※※※	0.47	0.53
指 導 教 官	-0.24	0.36※※※	-0.08	0.05
同 僚	-0.75	0.41※※※	0.27	0.37
指 導 者	-0.30	0.32※※※	-0.15	0.03

※※※ P<.001

強く期待していると思っている。スキーでは、その逆に「同僚」、「親友」が高くなっている。これは個人のインフォーマルな他者の影響が大きいといえる。

以上の結果から、一般大学生にとって「キャンプ」に対するイメージは、小・中・高等学校時代に経験した「学校キャンプ」にあるといえる。それが教師や

指導者といった公的・指導的立場にあるものが強く期待しているであろうという信念の強さとなってあらわれるものと考えている。スキーでは、仲間と楽しむレクリエーションなイメージが定着しており、「同僚」「親友」といった仲間集団が信念として強くあらわれている。



さらに、「家族」が両者において低い得点となっている。このことについて、岩野<sup>9)</sup>は青年期は家族から独立の時期であり、親からの依存を脱するようになり、教師との関係も両親に対するものと同じく反抗的な面もでてくる。友人関係は青年期の生活の中心領域を占めるようになると指摘している。つまり、本研究では精神的自立の時期であり、友人関係が生活の中心領域を占める大学生を対象とし、また強制されない自己の楽しみの獲得というレクリエーションの特性を考えた場合、キャンプ、スキーなどの野外レクリエーション活動においては、「重要な他者」との関係は極めて薄いといえる。

他者に従う動機づけの得点は、規範的信念と同様、中立点に近いが、キャンプ・スキーの両者において、「指導者」、「指導教官」が低く、「親友」、「家族」、「同僚」が高くなっている。規範信念と逆の結果がみられ、これは「重要な他者」として、日常の生活で最も身近な人（親友、家族、同僚）があげられている。つまり野外レクリエーション行動に影響を与える重要な他者は、必ずしも日常生活上の他者とは同一でないことを裏付けるものである。

#### IV 結語

本研究の目的は、野外レクリエーション行動の規定要因を明確にすることであった。その結果は以下のように整理される。

1. 行動意図は行動の直接的決定因であり、野外レクリエーション行動は、その行動を遂行しようとする人の意図によって決定され、測定される。

2. 行動に対する態度と主観的規範は、行動意図との重相関がそれぞれ単独の相関よりも高く、行動や行動意図は2変数を合成した方がより正確に予測される。

3. 野外レクリエーション行動の予測には、主観的規範よりも行動に対する態度がより大きな予測因となる。

4. 行動信念は態度に強く影響するが、規範的信念は主観的規範にほとんど関与しない。

5. 行動信念はキャンプでは精神的・社会的側面、スキーでは身体的側面が強調された。

6. 野外レクリエーションにおける規範的信念は、中立に近く、重要な他者の影響は少ない。

#### 参 考 文 献

- 1) Ajzen, I. & Fishbein, M., *Understanding Attitude and Predicting Social Behavior*, Prentice Hall, 101-111, 1981.
- 2) 総理府「スポーツに関する世論調査」：昭和51年10月。
- 3) 前掲書, 261 - 273.
- 4) Fishbein, M. & Ajzen, I., *Belief, Attitude, Intention and Behavior : An Introduction to Theory and Research*, Addison-Wesley : Reading, Mass., 1975.
- 5) 岡田至雄, レジャー社会学, 世界思想社, 83 - 87, 1982.
- 6) Riddle, P. K., *Attitude, Beliefs, Behaviorl Intention of Women and Men toward Regular Jogging*. Doctoral Dissertation, Univ. of Illinois., 1978.
- 7) 徳永幹雄, 多々納秀雄, 松本公雄, 金崎良三「スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究I)——ランニング実施に対するFishbeinの行動予測式の適用——」*体育学研究*, 25-3, 1980.
- 8) 江橋慎四郎: *新レクリエーション* ノドブック, 国土社, 27, 1981.
- 9) 岩野武志: *教育心理学*, 松原達哉編, 日本文化科学社, 44, 1977.